



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第二十二主日 A 年（2026 年 8 月 30 日）

主任司祭 小西 広志

第一朗読：エレミヤ書 20 章 7－9 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 12 章 1－2 節

福音朗読：マタイによる福音書 16 章 21－27 節

三つの朗読から

第一朗読は嘆くエレミアのところが表れます。しかし、いくら嘆いても、預言者の心の中に与えられた神のみことばは消えることはありません。「その言葉は私の心の中、骨の中に閉じ込められて、火のように燃え上がります」（エレ 20 章 9 節 フランシスコ会訳）。エレミヤは人々から笑いのものとされ、あざけりを受けるのを嫌がりました。しかし、そんな人間的な思いをはるかに超えて、神のみことばはまるでマグマのように彼の中で燃え上がるのです。そして彼を突き動かします。「あなたの勝ちです」（7 節 同）、「わたしは疲れ果てました。わたしにはもうできません」（9 節 同）は、神にすべてを委ねようとするエレミヤの心情を表しています。

第二朗読も同じように神の御心に適う生活をすべきだとパウロは説きます。そのためには自分自身を神に喜ばれる生けるいけにえとして献げるといふ礼拝が必要ですし、同時に神の御旨をわきまえることが必要となります。

福音朗読では、せっかく父なる神のおかげで「あなたはメシア、生ける神の子です」（マタ 16 章 16 節 新共同訳）と告白したペトロが、イエスさまのこれからの行く道を理解できず、人間的な理解で済まそうとします。それに対して、イエスさまは「十字架を背負って、わたしに従いなさい」（24 節 同）と諭しています。

イエスさまの十字架の道に従うとは、神のことばに魅せられたエレミヤと同じようにイエスさまに魅せられて、自分を聖なる生けるいけにえとして奉献しつつ、しかも自分自身を捨てて生きていくことなのです。

今日の朗読箇所から『マタイによる福音書』は新しい段階へと入ります。14 章 1 節から 16 章 20 節にかけてイエスによる天の国の宣教活動と、それに対するお弟子さんたちや人々の反

応が描かれていました。ペトロの「あなたは生ける神の子」（１６章１６節）という告白でイエスさまがどなたであるかが明らかになりました。１６章２１節以降からイエスさまは「受難、死、復活」を弟子たちに三回にわたって打ち明けながら、十字架へと向かう道のりを歩み始めます。今日の朗読箇所は受難の予告の一回目です。

２１節に「打ち明ける（デイクニューミ）」とあります。この言葉には大きく分けて二つの意味があります。一つは「指し示す、見せる、知らせる」です。次に「明らかにする、証明する」です。ここでは後者の意味で使われているでしょう。

イエスさまによる受難予告は三回あります（１６章２１節、１７章２２－２３節、２０章１８－１９節）。イエスさまに危害を与え、苦しめるのは一回目の予告では「長老、祭司長、律法学者たち」ですが、二回目の予告では「人々」（２２節：人の子は人々の手に引き渡されようとしている）となり、三回目の予告では「異邦人」（１９節：異邦人に引き渡す）と変化していきます。イエスさまの死がユダヤ人の指導者たちから、一般の人々、そして異邦人をも巻き込んだものであることが明確になります。つまり、イエスさまの死の責任は実は異邦人であるわたしたちと無関係ではないのです。

そして、同じ２１節には「復活することになっている」とあります。この訳文から二つの理解が可能となります。「必ず…べきこと」と理解して、イエスさまが受難と死、復活の出来事に対して運命のように受け身で理解しているというものと、「…ねばならない」と理解して、イエスさまが神さまのみ旨のかなう出来事として受難、死、復活を捉えているというものです。「しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう」（２６章５４節）とイエスさまは仰っていますから、神さまの思いとご計画の中でイエスさまはやがてくるご自分の受難、十字架での死、復活を受けとめているのでしょう。

だからこそ２４節の「自分を捨て、自分の十字架を背負って」が生きています。

「捨てる」は直訳すると「否定する」の意味です。ペトロがイエスさまを知らないといった時にもこのことばは使われています（２６章３４、７５節参照）。

イエスさまのお弟子さんとはイエスさまを知らないと否定する者ではなく、人間的な思いに凝り固まった自分を否定して十字架を背負って、イエスさまの後に従う人のことです。